

第3回いじめ問題調査委員会（令和4年3月14日開催）における保護者陳述要旨

1. 要望書を出した際、県内で逗子市だけが「いじめ防止基本方針」を策定していなかった。今回の事案が、逗子市として初めての事案になっているはず、様々な対応が常に後手に回っていたのは方針がなかったからである。
2. 保護者レベルに立った対応をしてもらえなかったのは保護者として辛かったこと。また、報告書を読む限り、全部担任の責任にされてしまっているような印象を受けた。

短い間に何件かのいじめ事案があったが、その場その場で対応している感が否めない。被害児童も関与児童も、どっちもどっちみたいな感じでいつも終わった。「いじめは絶対だめなんだ」ということを関与児童にしっかりと伝えてもらう必要があったが、そのようにはしてもらえなかった。
3. 関与児童の保護者と敵対関係にあるわけではなかったのに、もう少し意思疎通が取れていれば、こんなに深刻ないじめの問題にはなっていなかったという印象。

一回目のいじめ事案が起こった時に、保護者が会う機会が設けられ、お互い挨拶を交わしたが、その際にも、学校の方からは特に何が悪かったという説明がなく、ただ会って、「初めまして。すいませんでした」と、謝罪を受けて、それで終わった。校長の方からは、今回の対応に関して学校の不手際があつて、ということだけをひたすら謝られた。そんなことより、保護者同士でいじめをしないようにという働きかけをしてやっていければ、ここまでの話にはなっていなかった。

被害児童保護者と関与児童保護者を対面させるのであれば、学校側が事案に至った経緯や原因、加害者への指導、今後の対応などの具体的な内容を伝える必要がある。被害児童保護者と関与児童保護者との橋渡しやコーディネートは学校側の責任である。
4. こういったことの繰り返しや対応のまずさ、隠蔽体質を思わせる発言から、学校に対しても、市教委に対しても、かなり大きな不信感を持っている。疑心暗鬼というか、やることなすこと、どうなのかなという部分がある。
5. クラス自体が「学級崩壊」していたことを後から知った。不登校が始まったあと、クラスの見守りに行っている保護者から「死んでくれてありがとう」「机の上に花を置こう」などの発言があったと聞いている。学校がそのような保護者から話を聞いて、学級の様子を把握していないのが不思議に思う。

6. 不登校になった後、学校からの連絡が途絶えてしまった。開催された学級懇談会の案内ももらっていないはず。不登校に対する手当として、被害児童が来られるようにしようなどの話や転校についての説明など、保護者側から求めないと何も無い、話が進まないという印象を持っている。被害者に寄り添った進捗状況の連絡がないというのが問題である。逗子市はそういうスタイルなのかと思っている。

7. 小さなまちの中で起こった事案だが、今後中学校・高校と進んでいく中で、当然関与児童とまちで出会ったりすることもある。その際、「そんなこともあったよね」と話ができるようになるのが一番いいと思っている。仲良く、差し障りのなく会話ができればいいと思っている。